

ふるさと再発見

～重源上人の里 みてある記～

（五）^{そうとりぶち あまごい}僧取淵と雨乞

前回の国指定史跡「関水」の指定地域内の上流に、僧取淵があります。法光寺に伝わる『安養寺縁起』には「東大寺へ登す材木^{いかだ}を筏に組み僧一人これに乗り鯖川^{さばがわ}に流れ船路の内河中に淵あり、材木僧共に沈み忽ち証跡見えず。今に淵底に僧の魂魄材木あり；」とあります。重源上人の弟子の蓮花坊が材木を筏にその上に乗って下り、佐波川に野谷川が出合い流れは勢いを増し淵まで来ると、正面に大きな岩盤がせり出し急に蛇行し、一瞬のかじ取りのミスで巨木の筏は巨岩に激突して、蓮花坊は筏もろとも淵の深みに飲み込まれました。

遭難の現場はその後、僧取淵、僧取岩と呼ばれ、今にその面影を残し語り継がれています。また淵に沈んだ材木は埋もれたままで、坊主木と呼んでいます。



僧取淵

安養寺縁起は次に、「後世干ばつの時雨乞の為に万民木棒を以て淵底の材木を動かせば雨は三日内に降ると。後人これを僧取淵と言う。」とあります。

私が昭和四十五年に法光寺に住して三年目の四十八年は、梅雨時に殆んど雨が降らず、夏中も晴天^{つづ}續きでダムも殆んど枯れた状態になり、八月三十日に「雨乞い」が実施されました。私は安養寺縁起にある雨乞いを観に勇んで行きました。

先ず下庄の蓮花寺跡から蓮花坊像^{こし}を輿に載せ、鉦や太鼓^{かね}を鳴らし行列を組んで僧取淵へ向かう。淵の水で沐浴^{もくよく}した蓮花坊像を輿に納めて河原の祭壇に安置し、徳祥寺と宗圓寺の和尚さんと地域の人々が、般若心経を何回も何回も繰返し読んでご祈祷^{きとう}し、一方では、坊主木にかずら綱をかけて近隣の老若男女がその綱を引く様は、東大寺再建の用材を奈良へ運び出す様子の再現の姿でした。そして、晴天續の天候は次第に雲を呼び三日目の夕方から雨が降り出したのです。八百年来伝承された雨乞行事が、人々の切なる思いと、重源上人の神通力で実現したのでしょうか。

蓮花寺は、重源上人によって蓮花坊供養のため文治五年(1189)に建立され、その後寛永元年(1624)蓮花寺を大原に移し源徳寺と改称。明治3年下野谷の吉祥寺と合併し翌四年徳祥寺と改める。昭和三十一年佐波川ダム建設のため、現在の下野谷に移転しました。